

Opera

## 現代に通ずるリアルな設定 チューリヒ歌劇場《ギヨーム・テル》

EUとの間で妥協しながらも、永世中立国を貫いているスイス国民にとって、ウィリアム・テルの伝説は過去のメルヘンではない、と痛切に感じさせられる公演だった（11月19日・チューリヒ歌劇場）。

14世紀に現在のスイス連邦の核となる3州が、ハプスブルク家の圧力から自分達を守るために独立した。その時の英雄、ウィリアム・テルの言い伝えに触発されたシラーが書き上げた物語を基に、ロッシーニが仏語の脚本を書かせ、彼の最後のオペラ《ギヨーム・テル》が生まれた。

今回の演出は現在のスイスに時代を移し、占領しようとしているのはEUという設定である。序曲の間、山頂のバス停にどんどん人が集まって来るのが、音楽への集中力を欠かせたせいもあるのか、ジャンルイジ・ジェルメッティ率いるオーケストラは、前半の深い音楽をじっくり聴かせてはくれなかった。しかし、後半の有名なテーマに移る頃には、輝かしい響きが聴かれるようになり、楽しめた。

題名役のミケーレ・ペルトゥージは安定した歌唱で好演し、日本でも名を馳せているアントニーノ・シラゲーザは難所の多いアルノール役を危なげなく歌いきった。マティルデ役のエヴァ・メイは、ヴェルディ初期まで予見させるこのオペラには軽過ぎる発声で、特にアリアでの長いレガートを保つことができなかったが、演技力とアンサンブルでは説得力を発揮していた。テルが、息子の頭に乗せたリンゴを射落とすよう命令されるシーンは有名だが、娘に代わっており、軽いソプラノのマルティナ・ヤンコヴァが歌っていたのが、物語の重みを削いでいた。ゲスレルに矢が命中する場面も稚拙な演出だったが、最後のアンサンブルは、一階席のドアの前にソリストたちが立ち、劇場全体を包み込む歌声と、舞台の背景に浮かぶ無数の街明かり、そして国旗が立つスイスの地形が感動の渦を生み出すことに成功したようで、拍手喝采のうちに幕が下りた。（中 東生）